

第十六課

いつまでも放っておかず、すみやかに

勝ち抜く祈りの力

「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。……主は言われた、『不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。』

まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。』」

(ルカ一八・一一八)

祈りの世界の奥義の中で、忍耐強く祈る祈りは、最も必要とされているものの一つです。私たちに恵み、祝福したいと願っておられる主に、何度も何度も、時には何年も何年も求め続けなければ答を得られないというのは、どういう理由によるのでしょうか。これは、信仰の祈りを実施するにあたって最大の困難でもあります。辛抱して祈り抜いたあげく、その祈りが答えられないままになります。神は、何らかの理由で私たちの求めに対する回答を引き延しておられるのだか

ら、このへんで祈るのをやめた方がいいかもしれない……。生れつき怠慢な者にとってこう考え

ら、このへんで祈るのをやめた方がいいかもしれない……。生れつき怠慢な者にとってこう考える方が簡単であるし、その方が敬虔な服従であるときえ思えるのです。

この困難に打ち勝つことができるものは、ただ信仰だけです。信仰によって神のみことばと御名の上に立つて、御霊の導きに従い、祈りによって神のみことばと御栄えを求めるなら、答が遅れるからといって落胆する必要はありません。信仰の祈りの力には敵はなく、本当の信仰は落胆するはずはありません。そのことは聖書に明らかです。その無敵の力を発揮するためには、その力が集められ、蓄えられて、水にたとえるなら一つの流れの力とならなければなりません。祈りが蓄積され、神が十分だと認められると、祈りの答が与えられます。種を蒔く人は何千歩も歩いて、何千もの種を蒔きます。その一つ一つが収穫につながるのです。同じように、何度も繰り返して祈ることが必要です。それがすべての祝福につながるのです。信仰の祈りは、どんな小さなものでも天において結果を生じないものではありません。最後まで耐え忍ぶ者には、定められた時に答がもたらされるのです。人間の知恵や可能性ではなく、生ける神のみことばによるからです。アブラハムは、「望み得ないのに信じて望み」、「信仰と忍耐によって約束のものを相続」しました。信仰は、主の答がひま取ることから、その救いが、そして約束の成就が近づいていることを認めるのです。

祈りに対する答がすぐ与えられない時、静かな忍耐と喜びにあふれた確信をもって辛抱強く祈

つていくには、特に、次の二つのことばを理解するように努めなければなりません。「いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。」このことばは、夜昼神を呼び求めている選民に対することばであり、不正な裁判官の性格と行動としてではなく、神であり父であるお方の性格と行動として語られたものです。

主は、神がすみやかに正しいさばきをしてくださると言われます。祝福はすべて用意されています。神は、人々が求めるものを与えたいと思っておいでのになるだけではありません。何とかして与えたいと願っておられるのです。永遠の愛なる神は、何とかしたい気持を燃やされ、愛する者に永遠の愛を明らかにし、その必要を満たそうとされます。神は、絶対に必要な時を一瞬たりとも遅らせるようなことはなさいません。全力をもって、すみやかに答を与えてくださるのです。

しかし、もしこのことが真実で、神の力が無限であつたとしたら、なぜ、祈りの答が長く遅れるのでしょうか。なぜ、神の選民は、苦しみと葛藤の中で夜昼叫び続けなければならないのでしょうか。「神は忍耐しておられる。」「見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。」農夫は、確かに収穫を待っています。しかし、十分な日光と雨が必要であることを知っているのに、じっと忍耐をするのです。子供は、がまんできな

くなくて、まだ熟していない実をもぎ取ってしまいます。しかし、農夫は時が来るまで待つことを知っています。人間は、霊的世界においても、全被造物を支配する漸進的進歩の法則のもとにあります。神の定めた目標に達するには、この進歩の道を通るはかはありません。時は、御父の御手の中にあります。たましいや教会の信仰が完全に熟して祝福を得る時を知っておられるのは御父です。父親は、息子が学校を終えて家に帰って来ることを願いつつ、教育が完了する時期を忍耐して待ちます。神と神の子たちも同じです。神は長く忍ばれるが、また、すみやかに答えられるお方です。

この真理を自分のものにする時、信徒はそれにふさわしい性向を身につけるようになります。すなわち、忍耐と信仰、待つことと急ぐことです。これが忍耐の秘訣です。私たちは、神の約束を信じる信仰によって、自分が神に求めたものを、すでに与えられたと信じることができるのです。信仰は、約束の答を、目に見えなくても霊的には所有しているものとして受けとめ、保持し、それを喜び、そのゆえに神を賛美します。しかし、みことばをそのように受けとめて答を得ているとする信仰と、約束を実際に経験する、より確実で、完全で、成熟した信仰とは、相違があります。辛抱強い、不信仰でない、確信に満ちた、主をたたえる祈りの中でたましいは成長し、主と完全に一つになります。その祈りの中でこそ、たましいは主の祝福を自分のものになります。私たちの周囲にあるものや、私たちがその一部となっている万物の組織の中や、神の支配す

るものの中に、私たちの祈りによって整理されるべきものがあるかもしれません。神の御命令に従ってすでに与えられたと信じる信仰は、神が時間をお取りになることを認めるし、これまで辛抱したのだからこれからも辛抱しなければならぬことも悟ります。このような信仰は、静かな、首尾一貫した断固とした忍耐をもって、祝福が与えられるまで、祈り、感謝を続けます。そこで、最初は矛盾するように見えた、見えない神の約束をすでに与えられたものと信じる信仰と、与えられるまで夜昼呼び求める忍耐とが一对のものであることが分るのです。神の忍ばれることとすみやかさとは、神を待ち望む子たちの、勝ち誇りしかも忍耐をする信仰によって矛盾しないものとなります。

答の遅延という学課において最も危険なことは、結局、自分たちが求めたものはみこころになわないのだと考えてしまうことです。自分の祈りが神のみことばにもとづいており、聖霊の導きのもとにあるならば、恐れることはありません。神に時間を差し上げることがを学びましょう。神は、私たちに関することで時間を必要とされるのです。私たちに對して神が完全に御臨在の力を發揮できるように、御自身と日々交わるために時間を差し上げなければなりません。信仰が本物であることが証明され、私たちの全存在を信仰が満たし、神御自身が信仰からビジョンへ導いて、神の栄光を見ることができるよう、日々待つ時間を差し上げます。遅れても信仰を動揺させないようにしましょう。信仰において、遅延はしばしば良い結果をもたらします。葉が出

て穂が出て、その先に実になります。信仰の祈りは、一步一步最終的な勝利へと近づいて行くのです。信仰の祈りは、実が熟するのを助け、私たちをいつそう信仰の祈りへと近づけます。信仰の祈りは、祈りも信仰もただ神にのみ向けさせるものです。信仰の祈りは、見えない世界の障害を克服し、結果を早くもたらすものです。神の子よ。御父に時間を差し上げなさい。神はあなたに忍耐をもって臨んでおられます。神は、祝福が豊かで、完全で、確かなものとなるように望んでおいでになります。夜昼叫ぶ時にも、神に時間を差し上げなさい。ただ次のことばを忘れないように。「あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。」

このような忍耐深い祈りの祝福は、ことばで言い表すことのできないほど素晴らしいものです。信仰の祈りはど心をさぐられるものではありません。信仰の祈りは、祝福を妨げるあらゆるものを見出し、告白し、放棄させます。神のみにかなわないものは、どんなものでも、あってはなりません。信仰の祈りは、祈りを教えることのできる唯一のお方とのいっそう親しい交わりへと私たちを導きます。また、血潮と御霊のもとへと近づける、より完全な献身へと導きます。信仰の祈りは、より親しく、より純粹にキリストのうちにとどまることを私たちに求めます。クリスチャンよ！神に時間を差し上げなさい。神はあなたにかかわるすべてを完成してください。「忍耐を持ちつつ、すみやかに。」これは、あなたが祈りの門に入る時の神の合言葉

です。この合言葉を自分のものにしないさい。

自分のための祈りでも、他の人のための祈りでも、祈りはすべてこのようであってほしいのです。肉体労働でも、精神労働でも、あらゆる労働には、時間と労力が必要です。私たちはそれに没頭しなければなりません。勤勉な思慮深い労力に対してのみ、自然はその秘密を明らかにし、その宝を提供します。私たちはあまりにもそのことを知らないのです。霊的な農作業でも同じです。天の土地に種を蒔き、労力をつぎ込み、天界に影響力を及ぼすには、自分の全存在を要します。私たちは祈りに没頭しなければなりません。そして、途中でやめさえしなければ、時が来れば必ず刈り取るという、大きな確信を持ち続けるようにしましょう。

キリストの教会のために祈る時には、特にこの教訓を学びましょう。教会は、主が不在の時は、敵の思うままになって、あたかも救いようのないあわれなやもめのように見えます。この世の力のもとにある教会のために祈る時には、主の御霊が臨んで力強く働き、主の再臨に備えて教会を整えてくださるよう確信をもって祈りましょう。祈りは役に立つものです。気落ちしないで絶えず祈るなら、答は与えられます。ただ、神に時間を差し上げなさい。そして、夜昼神に叫び続けなさい。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょう。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてください

まふ。」

私の神、主よ。今こそ、あなたの道を知り、あなたの愛する御子が教えてくださった、「神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます」ということを、信仰によって理解できるように教えてください。あなたの優しい愛と、喜んで子の祈りに耳を傾け祝福をくださるうとしているあなたのお気持が、私を導いて、自分が信じたものが与えられ、自分には求むべき願いがあり、時が来れば答が与えられるという、あなたの約束を暗黙のうちに受け入れるようにさせてください。主よ。私たちは、自然界の四季を理解し、自分が求めている実は、忍耐して待たなければならぬことを知っています。あなたは、一瞬たりとも時を遅らせることはなさらないこと、また、信仰は答を早くもたらすことを、私に確信させてください。

恵み深い主よ。夜昼呼び求めるのは、神の民である証拠であるとおっしゃいました。これを理解できるようにしてください。私たちがいかに弱りやすいか、疲れやすいかをあなたは御存知です。私は、神があたかも絶えざる祈りを必要としないう方であるかのように思っ、執拗に祈ることをしません。主よ。祈る労力というものがどんなに現実的なものであるかを私に教えてください。この世では、事に失敗した後に、心機一転努力することにより、また、時間をかけ、よく

考えることによって成功することがよくあることを知っています。私は、もっと完全に祈りに打ち込みます。どうか、祈りに生きることを教えてください。そうすれば、私は自分の求めたものを手にすることができます。そして、何よりも、ああ恵み深い教師よ！ 信仰の導き手、また完成者であるお方よ。私の全部の生活が、私を愛し、私のために御自身をささげてくださった神の御子を信じる生活となりますように。このお方にあつて、私の祈りは受け入れられ、答の確信を与えられ、答が自分のものとなるからです。主イエスよ。私は、この信仰をもつていつも祈り、決してへこたれません。アーメン。

注

辛抱強い、執拗な祈りは、求めたものは与えられるという信仰と矛盾するように思えます（マルコ一・二四）。聖なる生活の奥義の一つは、漸次的と即時的の調和、また即時の完全所有と漸次の不完全所有との調和にあります。だから、ここで辛抱強い祈りは、たましいが強められて大胆な信仰を抱くようになる学校のように思えます。御霊の働きの多様性ということを考えて、ある人にとっては、信仰が辛抱強く待つという形をとるし、またある人にとっては、勝利の感謝の形をとることが、祈りを聞かれた確信の唯一の適切な表現のように思えます。

辛抱強く祈ることの必要と、ついにはそれが答えられるところまでになることが、ブルームハルトの生

涯によく現れています。彼が、福音の宣教師としての務めを怠って、病人をいやすことに熱中していること、ことに自分の教会員でない者までいやしているというところで非難を受けた時、次のように弁明をしています。「私はただ、たましいに責任を持つ者として、ヤコブの手紙一章六、七節の主の御命令に従って祈っただけです。私は、自分の力に頼ろうとしたり、他の人以上の賜物を持っていると思ったことは全くありません。しかし、このことだけは確かです。私は福音の宣教師として祈りに没頭しました。しかし、すぐに分ったことは、私に対して、天の門が完全に開かなかったことです。しばしば私は絶望しそうになりました。しかし、だからも見放された病人の姿を見ると、私の心は休まりませんでした。私は、『求めなさい。そうすれば与えられます』という主の言葉を思い出しました（ルカ一・九、一〇）。更に私は、教会と教役者たちが、不信仰と怠慢と不従順によって、サタンの力に打ち勝つために必要なことをしていないとすれば、それは、夜中に来て三つのパンを求めた友人のたとえの不作、飢饉の時と同じではないかと考えたのです。私は、この大きな暗黒の時代に、何とかしてほしいと願っている教会員のために祈るにはふさわしい者ではないと思っています。しかし、病人をそのままにしておくわけにもまいりません。そこで、私は主のたとえのように戸をたたき続けたのです。あるいは、ある人が言ったように、大胆にも神を試したのかもしれない。とにかく、私には病人をそのままにしておくことができなかったのです。この時、やもめのたとえが、この上なく尊く思われました。私は、教会がやもめで、私は教会に仕える者であることが分りました。私は、教会の敵に対して、教会の代弁者となる権利を持っていました。しかし、長い間、その権利を行使しませんでした。私は三つのパンを求めました。客が必要としたものを求めたのです。ついに主は、しつこい物乞いの声を聞いて助けてくださいました。このように祈ることは間違っているでしょうか。二つのたとえは、どこか相通じるものがあります。これ以上に必要とされるものが他にあるでしょうか。

私の祈りの結果はどうだったでしょうか。最初気の進まなかった友なるお方は、私に向かって、『さっさとお帰り。私は自分でお前の友人に必要なものをあげるから、お前はいなくてもよい』とは言われずに、私を御自分の友として客に与えるものをお与えになったのです。そこで私は、三つのパンを使って恵みを施すことになりました。しかし、わずかしかなところへ、新しい客がやって来ました。私に助ける気があり、たとい夜中でもめんどうがらずに友人のところにいくことを知っていたからです。彼らのために願うと、必要が与えられ、残るものもありました。困った人々がどんどん来てしまつたらどうしよう。心を堅くして、どうしてここに来るのだ、町にはもっと大きな金持の家があるではないかとでも言うべきなのでしょう。彼らはこう答えます。『私たちはあそこへは行けません。もう行つて来ました。彼らは、飢えたまま私を帰すのは申しわけないと言っていました。でも彼らは、友人のところへ行つて、私たちの必要を訴えることはしませんでした。だから、行つて私たちのためにパンをもらつて来てください。私たちはたいへん困つてゐるのです。』私はどうしたらよいでしょうか。彼らの言っていることは本当です。私は、彼らの苦しみを黙つて見ておられません。何とかして、何回でも行つて、三つのパンをもらつて来ます。最初の時より、求めたものを早く、もっとたくさん与えられることがよくありました。それでも、全員がこのパンをほしがつたわけではありません。中には、空腹のまま帰つた者もありました。」

ブルームハルトが初めて悪霊と戦つた時には、最終的な勝利を得るのに、そのような祈りと労力を十八か月間も要したということです。しかし、その後、御座のもとに心おきなく出て、見えざる世界との親しい交わりができるようになると、病人のために祈つてほしいという手紙が来ても、ほんの一瞬上を見上げるだけで、病人がいやされるかどうかの答を得たはどつたそうです。